

スポーツと「認識的ナショナリズム」：先行研究のレビューから

Sport and “Cognitive Nationalism”: A Review of Previous Studies

キーワード：スポーツ・ナショナリズム、「認識的ナショナリズム」と「理想的ナショナリズム」、
ナショナル・チームのプレースタイルに関する言説

Keywords: Sport Nationalism / Sportive Nationalism / Sporting Nationalism,
“Cognitive Nationalism” and “Ideal Nationalism”,
Discourses on the Playstyle of National Teams

笹生 心太

SASAO Shinta

Abstract

This study aims to answer the question: “Why do people feel a strong attachment to people of the same nation who are complete strangers to them?” We attempt to answer this question through the lens of sports.

First, we confirmed that the interest of this research is nationalism in the dimension of “cognitive nationalism,” and reviewed previous studies on the topic. As a result, it became clear that the nation’s self-understanding discourses play an important role in imprinting “cognitive nationalism” on its people.

Next, we reviewed previous research papers on sociology of sports that discuss the relationship between discourses on the nation’s self-understanding and “cognitive nationalism”. Consequently, it became clear that various types of discourses that imprint “cognitive nationalism” on people were employed in international sporting events. However, it also became clear that prior research on the topic has limitations concerning its validity.

1. はじめに

我々は、オリンピック・パラリンピック（以下「オリパラ」）や、サッカーやラグビーなどのワールドカップ（以下「W杯」）において、自国選手の活躍に一喜一憂する。こうした自ネイションに肩入れる感情、すなわちナショナリズムは、ノーベル賞の受賞者発表や戦争などの場面でも見られる。しかし、そもそもネイションとは曖昧なものであり、人々の想像上で構築されたものに過ぎない[Anderson, 1991]。すなわち、

同じネイションの成員の多くは基本的に赤の他人であり、例えば血縁関係に結ばれた家族などとは質的に異なる。にもかかわらず、同じネイションの成員同士はお互いに強い愛着を持つ。それはなぜなのか。これが本研究の基本的な問題関心である。

2019年に日本で開催されたラグビーのW杯では日本代表チームが大きく躍進し、その結果日本国内で大きな関心事となったが、その中でナショナル・チームとは何なのかという問題もクローズアップされた。日本代表チームのジャージーを着用してプレーした

選手の中には、様々な人種、様々な国籍の選手がいた。例えば日本代表チームのキャプテンを務めたリーチマイケル選手は、ニュージーランド出身の父親とフィジー出身の母親の間に生まれ、2013年に日本国籍を取得した選手だった。また、アマナキ・レイ・マフィ選手はトンガ出身であり、トンガ国籍のまま日本代表チームの一員として活躍した。このように、日本代表チームには帰化選手や外国籍選手が多く含まれていた。

サッカーや野球など、ラグビー以外の多くのスポーツ種目においては、当該ネイションの国籍を持つことがナショナル・チーム選出の前提条件である。そのため、しばしば帰化選手がナショナル・チームに加わることはあるものの、他の国籍の選手がナショナル・チームに参加することは基本的にない。そうした基準から見れば、様々な人種・国籍の選手が混在するラグビーのナショナル・チームの存在は、特異なものと言えよう。そのため、ラグビー以外のスポーツに親しんだ人の中には、ラグビーの日本代表チームのあり方に違和感を持つ人も一定数いたに違いない^{注1)}。

国際スポーツイベントでは、ネイションの境界線を暫定的に「確定」し、「どこからどこまでが自ネイションなのか」を視覚的に提示することが競争の前提になっている^{注2)}。その結果、それを観戦する者たちは、自分がどのネイションに所属し、誰が「我々」であり、誰が「他者」であるかを視覚的に認識する。このようにスポーツは、人々の想像上の構築物にすぎないネイションに対して、疑似的な「実体」を与える。この点において、スポーツはナショナリズムの問題を論究する上で格好の題材となり得る。

そこで本研究では、スポーツを題材として取り上げ、「赤の他人にもかかわらず、なぜ人々は同じネイションの成員に強い愛着を抱くのか」という問題について論究していきたい。

2. 先行研究

2.1 スポーツとナショナリズムの結びつきに関する先行研究

日本におけるスポーツとナショナリズムに関する先

行研究についてのレビューを行った笹生[2017:99]によると、先行研究の重要な限界は、①ナショナリズムという概念を無規定に利用する傾向にあること、②スポーツとナショナリズムの結びつきを記述するものは多いが、その結びつきを理論的に説明しようとする研究が少ないこと、そして③オリパラやW杯などの「非日常」のイベントへの言及が多く、「日常」的事例への言及が少ないことであった。

そして笹生[2019]は、上記の笹生[2017]が指摘した①先行研究のナショナリズム規定が曖昧であるという点について、詳細に検討を加えている。まず同研究は、ネイションの語の持つ多様な含意に沿って、ナショナリズムを「国民主義」「民族主義」「国家主義」と訳し分け、先行研究がそれぞれの意味でのナショナリズムについて論究しているのかを分析した^{注3)}。その結果、先行研究はそれぞれ異なる意味でナショナリズムの語を運用しているために、相互参照可能性が低く、そのためスポーツとナショナリズムに関する理論的考察が深まっていかなかったとする。すなわち、笹生[2017]の指摘した②スポーツとナショナリズムの結びつきに関する理論的説明を行う研究が少ないという限界が、①ナショナリズム概念の規定の曖昧さに起因することを指摘している。

また笹生[2019]は、その発生する局面に沿って、ナショナリズムを「創造型ナショナリズム」と「再構築型ナショナリズム」に分け、先行研究がどの局面におけるナショナリズムを取り扱っているのかを整理した^{注4)}。その結果、スポーツという題材が、ナショナリズム研究を理論的に前進させる可能性を持つことを指摘した。すなわち、メインストリームの社会学領域では、例えば明治期における日本人意識の生成[牧原, 1998]のような「創造型ナショナリズム」についての分析が多く、現代社会を題材とした「再構築型ナショナリズム」についての分析は必ずしも多くない。一方でスポーツ社会学領域のナショナリズム研究の多くが、既存のネイション同士の対抗戦であるオリパラやW杯などの際に生じる「再構築型ナショナリズム」について論究している。以上のように、スポーツという題材は、これまでメインストリームの社会学領域で言及されることの少なかった「再構築型ナショナ

リズム」の実態を記述・説明できる可能性を持っている。

2.2 「認識的ナショナリズム」への着目

以上の笹生[2017]および笹生[2019]による指摘を踏まえるならば、今後スポーツとナショナリズムの結びつきに関する研究を前進させるためには、メインストリームの社会学領域にて論究が手薄だった「再構築型ナショナリズム」の事例に焦点化することが有効である。その上で、当該研究においてどのような種類のナショナリズムとスポーツの関係を論じるのかを明確化し、スポーツがいかにしてそのナショナリズムを刷り込むのかを説明的に分析することが求められる。以下では、以上の指針に沿って、スポーツとナショナリズムの結びつきに関する研究を理論的に前進させるための「見取り図」を提示したい。

まず、本研究の関心に沿って、どのような種類のナショナリズムについて論究するのかを確認する。その際に有効となるのが、津田[2016]による「認識的ナショナリズム」と「理想的ナショナリズム」の区分である。同研究は、1980年代以降に様々な意味合いで用いられるようになったナショナリズムという言葉の理解を整理するために、「認識的ナショナリズム」と「理想的ナショナリズム」という分析概念を提示した。「理想的ナショナリズム」は、思想や運動の形で顕在化するものであり、「自らが帰属する国民共同体にとっての利益、すなわち「国益(national interest)」の実現を訴えるあらゆる思想や運動、および国民共同体[引用者注：ネイション]の過去・現在・未来を讃える言説」[傍点引用元：津田, 2016:86]を意味する。一方、これを土台として支えるのが「認識的ナショナリズム」で、これは「見ず知らずの人びとを文化や言語等の共通の属性を有する「同胞」として想像し、そうした同胞の集合を明確な境界線を有する単一の共同体と見なす認識の枠組み」[津田, 2016:85]である。すなわち、本研究の冒頭で挙げたような素朴な同胞への愛着という認識の枠組みが「認識的ナショナリズム」で、それを土台としてよりはっきりとした主張を伴う「理想的ナショナリズム」が発生するのである。

「赤の他人にもかわからず、なぜ人々は同じネイ

ションの成員に強い愛着を抱くのか」という問題関心を持つ本研究では、戦争や独立運動などの場面で顕在化するナショナリズムというよりも、それを下支えるような、より日常的な実践に潜みながら人々の意識を規定するようなナショナリズムについて論究するほうが適切だろう。そこで本研究では、スポーツがいかに「認識的ナショナリズム」を刷り込むのかという点に分析の焦点を置く。

2.3 「認識的ナショナリズム」に関する先行研究

それでは、「認識的ナショナリズム」に関する先行研究は、それをどのように分析してきたのだろうか。

「認識的ナショナリズム」について、近年の研究の1つの準拠点となっている研究がBillig[1995]である。同研究は、日常生活の中にさりげなく存在する物や言説が、知らず知らず人々に「平凡なナショナリズム(banal nationalism)」を刷り込むと論じる。例えば新聞が「we」という人称代名詞を用いる際には、それは特定の地区の人間でも、世界中のすべての人間でもなく、ネイション全体を指すことが暗黙の前提として共有されている。さらに「the」という定冠詞は、ネイション全体を指し示すものとして機能する。例えば「首相(the prime minister)はプリストルに入り、トリー党のヨーロッパ選挙キャンペーンの第一声を行うと発表した」という新聞記事は、ごくありふれたものである。しかし、このthe prime ministerは、世界中のあらゆる首相のことを意味せず、「イギリスの」首相であることが前提とされている。以上のように、人称代名詞や定冠詞はさりげない形でネイションを示す直示(deixis)として機能し、「平凡なナショナリズム」を人々に刷り込む。以上のように、人々は「我々」と「彼ら」を区別するような言説に触れる中で、「我々」であるところの自ネイションの一員としての自覚が刷り込まれるのである。

なお、Billig[1995]は彼我を区別する表現に着目したが、より質的な表現もナショナルな一体感を涵養するうえで重要な役割を果たすと考えられる。例えば、1970年代以降、日本国内では日本人論が一種のブームとなった。その中に含まれる「日本人は個人よりも集団を重視する」といった言説は、日本人という

ネイションのあり方を再構築していたと言える[吉野, 1997]。このように、Billig [1995] が論じた単純に彼我の区別をつける表現のみならず、より質的にネイションの特性を言い表すような言説もまた、「認識的ナショナリズム」を刷り込むうえで重要な役割を果たすだろう。

3. 課題設定

以上のように、津田 [2016] の言う「認識的ナショナリズム」に関する先行研究は、ネイションの自己理解に関する言説が繰り返し消費されることで、目立たないように、人々の間にネイションの一員としての記憶や価値観が刷り込まれていくことを指摘してきた。

スポーツという文化領域は、この「認識的ナショナリズム」の生成について理論的説明を加えるための有意義な題材となり得る。なぜならスポーツは、上述のように、本来人々の想像上で構築されているにすぎないネイションに対して疑似的な「実体」を与えるからである。そしてそれを報じるメディアは、ネイションを一枚岩な存在としてみなすような言説を安定的・継続的に生産している。例えば「日本人はサッカー(スポーツ)を、どちらかといえばゲームとして捉えるが、韓国人はたたかいとして捉える。そこには民族的なメンタリティの違いがある」[サッカーマガジン877号:109]といった言説は、日本と韓国の両ネイションをそれぞれ一枚岩な特質を持つものと捉え、ネイションを「実体」化している典型的な言説である。このようにスポーツの報道の中では、ネイションを単位として「我々」と「他者」を線引きするような言説が多く見られる。そのため、スポーツという題材はネイションの自己理解の言説を分析するための格好の題材と考えられる。

以上の議論から、本研究の問題関心から見たとき、スポーツの場面におけるネイションの自己理解の言説が、いかに人々に「認識的ナショナリズム」を刷り込んでいるかについて論究する必要があることが見えてきた。しかし、具体的に言説を蒐集し、分析を行う紙幅は残されていない。そこで以下ではスポーツと「認識的ナショナリズム」に関する先行研究のレ

ビューを行い、具体的な実証作業は別稿にて行うこととした。

4. スポーツと「認識的ナショナリズム」に関する研究状況

上記のように、スポーツにおけるネイションの自己理解の言説は、人々に「認識的ナショナリズム」を刷り込むと考えられる。こうした関心からの研究は国内外で多く行われている。以下ではまず英語圏の研究をレビューし、その後日本語圏の研究状況を概観する。

4.1 英語圏における研究

まず、そもそもBillig [1995] は、「平凡なナショナリズム」を刷り込む言説がより強く表れる場として、スポーツの試合を報じる新聞記事に着目している。つまり、イギリス国内には保守からリベラルまで様々な志向性の新聞があり、一般的に保守的な新聞ほど「平凡なナショナリズム」を刷り込むような言説が多く掲載されていたが、スポーツの記事だけは別だった。つまり、リベラルな新聞ですら、スポーツの結果を報じる記事では「平凡なナショナリズム」を刷り込むような言説を多く生産していたのだ。例えば、同研究が新聞記事を具体的に取り上げた1993年6月28日にはテニスのウインブルドン選手権が行われていたが、リベラルな新聞も含め、多くの新聞がイギリス人選手であるアンドリュー・フォスターの活躍を賞賛していた。そして彼を「我々」のヒーローと呼び、読者に対して彼を賞賛するように促していた。ここでは、明らかに読者がイギリスというネイションの一員であることが自明視されており、さらに読者が自ネイションの一員の活躍を賞賛することが当然であると考えられている。

そして、スポーツ社会学領域においては、1996年にイングランドで開催されたサッカーのヨーロッパ選手権(以下「ユーロ96」)におけるイングランド代表チームの報道に着目した研究が多く見られる。具体的には、この大会期間中のイギリス紙8紙の報道の特徴を分析したもの[Maguire and Poulton, 1999]、大会期間中のドイツ紙2紙との比較の中でイギリス

紙8紙の報道の特徴を分析したものの[Maguire et al., 1999a]、イングランド対ドイツ代表の準決勝をめぐるイギリス紙8紙とドイツ紙2紙の報道に焦点化したものの[Maguire et al., 1999b]、そして大会期間中のイギリスのテレビ局2社の報道について分析したものの[Poulton, 2004]などがある。

これらの研究はいずれも、ナショナルなハビトゥス・コード(national habitus code)という概念を用いて分析を行っている。ハビトゥス・コードとは人々の無意識下に眠っている様々な記憶や気質の複雑な組み合わせであり、ナショナルなハビトゥス・コードは、ナショナル・アイデンティティを喚起するような特定のシンボル(例えばサッカーのナショナル・チームの試合など)を通じて活性化される。これによって、特定のネイションに対して自己同一化が促されると同時に、それ以外の人々を「他者」として排除するような、「我々」的自己同一感が生まれる。

これらの研究の成果を総合すると、サッカーのイングランド代表チームをめぐるイギリスの新聞報道の特徴は、以下のようなものであった。まず第1に、①「我々」と「彼ら」を区別するような表現が多用されていた。こうした表現は、1)人称代名詞を用いた表現と、2)対戦相手をステレオタイプ化する表現に区別することができる。そして第2に、②歴史的経緯に触れる表現が多用されていた。こうした表現は、1)自ネイションの過去の栄光を喚起する表現と、2)対戦相手との過去の因縁を喚起する表現に分けることができる。

①「我々」と「彼ら」を区別する表現の第1は、1)人称代名詞を用いた表現である。例えばBillig [1995]と同様の視点からユーロ96の報道を分析したMaguire et al. [1999a:70-71]は、ドイツの一般紙では「我々」や「彼ら」といった人称代名詞が約3%程度の記事にしか用いられなかったが、イギリス紙では一般紙で約25%、大衆紙で約40%も見られたことを明らかにしている。

また①「我々」と「彼ら」を区別する第2の表現は、2)対戦相手のステレオタイプ化である。それは例えば、「気まぐれなスペイン人」[デイリー・テレグラフ, 1996年6月24日]や、「オランダ人は自転車の国民なので、ペダルを逆に漕いで減速することに慣れて

いる[引用者注:ここで大会を敗退するだろう]」[デイリー・テレグラフ, 1996年6月19日]といったものである。これらのステレオタイプは、対戦相手はイングランドとは質的に違うということを暗に指し示すことによって、自ネイションの自己同一化をさりげない形で促すものと言える。

次に、②歴史的経緯に触れる表現の第1として、1)自ネイションの過去の栄光を喚起する表現がある。それは例えば、1966年のW杯でイングランド代表チームが優勝したことを踏まえて、「我々は1966年に成功した、そして1996年にも成功するだろう」[デイリー・ミラー, 1996年6月8日]というようなスポーツにおける過去の栄光をうたうものや、ネルソン海軍大将がトラファルガー海戦の際に述べた「イングランドは、各員がその義務を尽くすことを期待する」という言葉を念頭においた「イングランドは期待している」[デイリー・メール, 2006年6月10日]のようにスポーツ以外の場面における歴史を踏まえたものが見られた。

そして②歴史的経緯に言及する第2の表現としては、2)対戦相手との過去の因縁を喚起する表現がある。これは、過去の対戦成績のようなスポーツの枠内の出来事に加え、スポーツの枠外の出来事についても盛んに言及されていた。その最たるものは戦争の記憶と結びついたもので、スペイン代表チームとの対戦が決まった際に「この試合は、サー・フランシス・ドレークがスペインの無敵艦隊を撃破して以来の重要な戦いである」[ザ・サン, 1996年6月20日]という表現が見られたり、準決勝でドイツと対戦することが決定した際に「全軍、降伏せよ!(ACHTUNG! SURRENDER)」[デイリー・ミラー, 1996年6月24日]という記事が見られたように、サッカーの試合を戦争のメタファーで報じるものが多かった。

以上のように、イギリスの新聞報道では、読者に対して自ネイションへの自己同一化を訴えかけるような表現が多く見られた。これに対して、Maguire et al. [1999a] および Maguire et al. [1999b] によれば、ドイツ紙の報道は比較的ネイションへの自己同一化を促す傾向が弱かった。イギリス紙に比べて自国代表チームを報じる際に①-1)人称代名詞を用いる割合は低く、また①-2)対戦相手をステレオタイプ化する

る傾向もあまり見られなかった。さらに、自国の歴史よりも現在の政治経済的繁栄に目を向ける傾向が強く、②-2) 対戦相手との過去の因縁を喚起する報道は少なかった。

またPoulton [2004]によると、イギリスのテレビの報道は、新聞報道に比べて穏健な傾向が見られた。新聞報道でよく見られた①-2) 対戦相手のステレオタイプ化やネガティブな描き方、②-2) 対戦相手との過去の因縁を喚起する報道、特に戦争のメタファーでの報道は、テレビでは抑制されていた。一方、②-1) 自ネイションの過去の栄光を喚起する報道は、テレビでも見られた。しかし、新聞が戦争の勝利などスポーツの枠外の話題にまで言及するのに対して、テレビではスポーツの枠内における過去の栄光に言及するにとどまっていた。以上のように、テレビの報道は直接的にナショナルなハビトゥス・コードを刺激する傾向は見られなかったが、ナショナルなシンボルへの焦点化、コメンテーターの語り、カメラ、音、そしてファンが歌っている様子など、新聞には見られない複合的な要素から、視聴者に対してナショナルな自己同一化を促していた。

さらに、ユーロ96から10年が経過し、ヨーロッパの統合が進んだ2006年のW杯ドイツ大会に関するイギリス国内の報道を分析した研究として、Vincent et al. [2010]がある。同研究は、ユーロ96に関する諸研究同様、ナショナルなハビトゥス・コードという視点からイギリス紙5紙を分析した。その結果、大会がイングランド代表チームのライバルであるドイツで行われたということもあり、①-2) ドイツに対するネガティブなステレオタイプが多く見られた。さらに②-1) 自ネイションの過去の栄光を喚起する表現や、②-2) ドイツとの過去の因縁を喚起するような表現も、10年前同様に多く見られた。また、同研究は特にイングランド代表チームのプレースタイルのステレオタイプに着目し、ファイティング・スピリット、勇気、プライド、自己犠牲、ライオンハート魂といった表現が多く見られたことも指摘している。これは、①-2) 対戦相手をステレオタイプ化することで彼我を区別する表現の派生であり、①-3) 自ナショナル・チームのプレースタイルをステレオタイプ化する表現と呼べるだろう。

そして、イングランドにおけるラグビーを取り上げた研究として、Tuck [2003]がある。同研究では、イギリスにおいてラグビーがイングリッシュネスの象徴として認識されているという前提から、1995年に南アフリカで行われたラグビーW杯におけるイギリス国内のテレビ報道と新聞報道を取り上げた。これらの報道は、「我々は試合に勝ちました。我々は世界チャンピオンを破りましたが、まだ2つのゲームが残っています。ただし、当面はもう少し勝利の美酒に酔いましょう」(ITVによる中継、1995年6月11日)といった①-1) 人称代名詞を用いる表現や、フォワードに強みがあり、セットプレーを多用するという①-3) 自ナショナル・チームのプレースタイルをステレオタイプ化する表現、そして戦争に関する詩を引用したり、南アフリカでの試合をポーア戦争に例えたりといった形で、②-1) 自ネイションの過去の栄光を喚起する表現を多く用いていた。

以上のように英語圏におけるネイションの自己理解の言説に関する研究は、①「我々」と「彼ら」を区別する表現と、②歴史的経緯に触れる表現に大別することができた。そして①の彼我を区別する表現は、1) 人称代名詞に着目する表現と、2) 対戦相手をステレオタイプ化する表現に分けることができ、さらに後者の派生として、3) 自ナショナル・チームのプレースタイルをステレオタイプ化する表現も見られた。一方、②歴史的経緯に触れる表現は、1) 自ネイションの過去の栄光を喚起する表現と、2) 対戦相手との過去の因縁を喚起する表現に分けることができた。

4.2 日本語圏における研究

日本語圏では、①-3) 自ナショナル・チームのプレースタイルのステレオタイプ化に関する研究が多い^{注5)}。その代表的研究として、有元 [2003]を挙げることができる。同研究は、サッカーファンの集合的アイデンティティについて論じる中で、ブロンバーガーによる「集合的イマジナリー」概念を援用した。これは「ファンの人々が、自分たちが応援するチームを語り、あるいはそのチームを通じて(例えば比喩として用いながら)自らの生活様式を語るときに喚起される「チーム」についての集合的な心性のようなもの」[有

元, 2003:37]であり、その集合的イマジナリーを構築するときにもっとも重要な要素がチームのプレースタイルであるという。

そして同研究は、こうした集合的イマジナリーの持つ作用は、ナショナル・チームのプレーについても同様だとする。ナショナル・チームを応援する人々は、自ナショナル・チームのプレースタイルについての言説に触れる中で、自らをネイションの一員として自己同一化する。その際、そうした報道はメディアによって構築されたバイアスを含むものであり、「ある特定の「国民的自己同一化」(すなわち「われわれ～国民」の構築)のあり方が押し付けられる可能性がある」[有元, 2003:41]のものである。こうして、ナショナル・チームのプレーを報じるメディアが、我々ネイションとはこのようなものであるという特定の解釈枠組みを前提とした報道を行うことで、それに触れた人々はその枠組みを前提としたネイションについての自己理解を刷り込まれることとなる。

さらに上述の有元[2003]の議論を参照しながら、山本[2010]は、日本のスポーツメディアにおける「物語」について論究している。具体的には、スポーツの報道の際には特定の「物語」、例えば「日本代表チームは組織力に優れる」といった「物語」が前提とされているため、「「やっぱり日本人は～だ」というように、あらかじめ固定化された日本人性に従って視覚的証拠を解釈するという暗黙の「観戦の規則」」[山本, 2010:274]が存在すると指摘する。このように同研究は、「日本代表チームは組織力に優れる」といったナショナル・チームのプレースタイルに関するステレオタイプ化された言説が、スポーツ観戦の予測不可能性という魅力を削いでいると指摘する。

以上の有元[2003]と山本[2010]は鋭い指摘をしてはいるものの、あくまで指摘のレベルにとどまっており、具体的な分析は行なっていなかった。そうした限界に対して一定の実証をもって応えようとした研究として、森田[2009]がある。同研究は、有元[2003]や山本[2010]と同様に、サッカー日本代表チームをめぐる報道の中で「日本代表チームは組織力に優れる」という言説に着目し、それをスポーツ報道における一種の「神話」としてとした。そして、日本代表チー

ムとガーナ代表チームの試合におけるテレビ中継を分析し、「組織力对身体能力」というテーマがあらかじめ設定されていること、ガーナ代表選手たちを論じる際の「身体能力」が曖昧に用いられていること、身体能力なるものは「肌で感じるもの」として論じられていること、そして「身体能力」という表現の持つ意味合いが放送の過程で変化し得ることを明らかにした。

4.3 スポーツと「認知的ナショナリズム」に関する先行研究の成果と限界

以上、国内外のスポーツ場面におけるネイションの自己理解の言説に関する先行研究の動向を整理してきた。

これらの研究の重要な発見は、国際スポーツイベントにおける報道がネイションの自己理解を反映していると同時に、そうした報道に触れる中で人々がネイションの自己理解を再生産している可能性を告発したことである。このことはBillig[1995]が先行的に指摘したことであるが、同研究は特定の1日の新聞記事のみしか分析対象として扱っていなかった。イングランド代表チームの報道に焦点化した諸研究は、国際スポーツイベントの全期間における新聞記事やテレビ放映の内容を複数検証しており、Billig[1995]の実証性の弱さを補うという意味合いを有していた。さらにこれらの研究は、Billig[1995]の指摘した①-1) 人称代名詞や定冠詞を通じた彼我を区別する表現のみでなく、スポーツの国際大会では様々なバリエーションの言説が生産されることを発見した。このことは、Billig[1995]の発見を乗り越えるものと言える。

だが、これらの諸研究も重要な限界を抱えている。その重要な限界は、一言で言えば実証性に欠けることである。

まず日本語圏の研究に関しては、有元[2003]や山本[2010]などは、各ナショナル・チームのプレースタイルが、例えば「日本代表チームは組織力に優れる」といったステレオタイプのもつて語られているということを、あまりに安易に断定している。確かに、論考中にその裏付けとなるいくつかの具体的な言説へ

の言及はあるものの、そうした言説が恣意的に選択された可能性を否定できず、それが本当に支配的なものなのか、あるいはそれとは異なる言説は存在しないのかといった点の吟味が不足している。

それに対して森田[2009]は、「日本代表チームは組織力に優れる」という言説の具体的な内容やその意味合いの差異などを指摘している点で、有元[2003]や山本[2010]よりも実証性がある。しかし、同研究による実証も、サンプルの恣意性に問題がある。すなわち、ナショナル・チームのプレースタイルに関する言説空間全体を把握した上でこうした実証を行なっているのではなく、ある1試合における言説を抜き出しているに過ぎない。そのため、こうした言説がプレースタイルに関する言説空間の中で代表的なものなのか、あるいはそうした言説の時間的制約、すなわちそれが変化するか否かという点が吟味ができていない点で重要な限界を抱えている^{注6)}。

以上のように日本語圏の先行研究の多くは実証性に問題を抱えているため、それらが取り上げた言説に代表性があるのか、またそれは時間的制約を受けないのかといった点を明らかにできていない。その結果、先行研究の「日本代表チームは「日本代表チームは組織力に優れる」とステレオタイプ的に語られる」という指摘自体にバイアスが含まれる可能性がある。実際、有元[2003:44]も、注釈にて、「そもそも、日本代表が歴史的に本当にこれまでも「組織力のチーム」だったかどうかは疑う必要」があり、そして創造性溢れる選手が日本代表チームの中心にいたという「現実」が、「日本代表チーム=組織力」という集合的イマジナリーの中で否認されているのではないかと指摘する。この指摘はきわめて重要だが、自身がこの点を実証する作業は行っていない。

そして英語圏の研究もまた、実証性に問題がある。日本語圏の研究に比べれば実証作業を精緻に行っているものの、特定の大会に関する報道のみしか分析しておらず、事例的なバイアスが避けられない。つまり、単体の大会、しかもネイションとしての一体感が高まりやすいと考えられる自国開催やライバル国のドイツ開催の大会に主に着目しており、人々が日常的に触れる言説がどのような様相を呈しているのかが

明らかにできていない。また、これらの研究の多くはイングランドの政治・経済的後退を背景とした分析を行っているにもかかわらず、政治・経済環境の変化に伴ってネイションの自己理解や他者理解がどのように変化するかを検討していない。国際スポーツイベントに関する報道が人々にナショナル・アイデンティティを刷り込むという側面に着目するならば、より日常的な報道を、長期スパンで分析する必要があるだろう。

5. 結語

本研究では、「赤の他人にもかかわらず、なぜ人々は同じネイションの成員に強い愛着を抱くのか」という問題関心のもと、スポーツを通じていかにしてこの問題を解くかについて検討してきた。

まず、本研究の関心は「認識的ナショナリズム」という次元のナショナリズムであることを確認し、それに関する先行研究を概観した。その結果、人々が「認識的ナショナリズム」を刷り込まれる際には、ネイションの自己理解の言説が重要な役割を果たすことが明らかになった。

そして次に、スポーツ社会学領域におけるネイションの自己理解の言説と「認識的ナショナリズム」に関する先行研究を概観し、主に英語圏の研究によって「認識的ナショナリズム」を刷り込む際に多様な言説が用いられていることが明らかとなった。しかし、国内外いずれの先行研究においても、その実証性に問題があることも同時に明らかとなった。具体的には、日本語圏の先行研究の多くは指摘のレベルにとどまっており、また英語圏の先行研究は国際スポーツイベントのような「非日常」の事例のみに着目していた。

スポーツがいかにして人々に「認識的ナショナリズム」を刷り込んでいるかを明らかにするために、今後行うべき作業は以下のことであろう。すなわち、分析対象となるネイションにおいて十分に認知されているスポーツ種目に焦点化し、人々が日常的に接する言説を長期スパンで体系的に蒐集する。そして、そうした報道の中に現れるネイションの自己理解が、いか

なるものとして語られているかを分析する。その際には、そうした言説が時系列的にどのように変化していくのかも考察する必要がある。

すでに見てきたように、こうしたネイションの自己理解の言説は、①「我々」と「彼ら」を区別する表現や②歴史的経緯に触れる表現など、多様な種類があり得る。その中でも注目すべきは、①-3) 自ナショナル・チームのプレースタイルをステレオタイプ化した表現である。なぜなら、スポーツは競争的なものであり、他のナショナル・チームに対して「どのように競争するか」というその方法が自ネイションの特色として重要なものと考えられるからである。このことから、今後はナショナル・チームのプレースタイルに関する言説に着目し、その言説がどのように構築されてきたのかを実証的に明らかにする必要があるだろう。

注

- 1) 例えば朝日新聞[2019年10月22日]には、「外国人にも代表の門戸が開かれており、たとえば3年以上続けて住めば資格が得られる。最初は「日本代表っぽくない」とも感じたが、これもなかなかいい、いやこれは相当いいと思えてきた。国籍があらうがなかろうが、住む人、関わりのある人全てで作るのが、この社会なのだから」という読者の意見が掲載された。この意見のように、多民族・多国籍なナショナル・チームの編成は、2019年のW杯において総じてポジティブなものとして表象されることが多かったと思われる。しかし、この意見の冒頭にあるように、当初はこうしたナショナル・チームのあり方に違和感を覚える者もまた多かったと考えられる。
- 2) 国際スポーツイベントを管轄する競技団体ごとに、ナショナル・チームの境界線は異なる。例えばサッカーの場合、イングランド、北アイルランド、スコットランド、ウェールズはそれぞれ個別のナショナル・チームとして編成されるが、オリパラの場合にはこれらのネイションはイギリス代表チームとして統一される。さらに、サッカーでは個別のナショナル・チームである北アイルランドとアイルランドは、ラグビーの際には1つ

のナショナル・チームとして編成される。

- 3) ここでは、「国民」を「ある国家の正統な構成員の総体」[塩川, 2008:7]として捉えている。また「民族」については「血縁ないし祖先・言語・宗教・生活習慣・文化などに関して、「われわれは〇〇を共有する仲間だ」という意識——逆にいえば、「(われわれでない)彼ら」はそうした共通性の外のある「他者」だ」という意識——が広まっている集団」[塩川, 2008:3-4]としての「エスニシティ」が、自らの国家ないしそれに準じる政治的単位を持つべきという意識が広まった集団として捉えている。そして「国家」は、人間の集団を意味する「国民」や「民族」と明確に切り分けられるものであり、「その運営を担う人間が入れ替わっても存続していく脱人格化された制度」[笹生, 2019:113]と捉えられている。
- 4) 「創造型ナショナリズム」と「再構築型ナショナリズム」の区分は、吉野[1997]によるものである。前者は、第二次世界大戦後に各地で起こった民族運動のように、いまだネイションとして認められてない集団がネイションとしての地位を獲得しようとする際のナショナリズムである。一方の后者は、既存のネイションの中で、人々が自らのアイデンティティを確認するようなナショナリズムである。
- 5) 浜田[2016]も、1930年代のオリンピックに関する国内の報道を、①彼我の区別をつける表現に着目して分析している。ただし、同研究の中心関心はオリンピックという大会がメディアイベント化していった過程にあり、ナショナリズムはその説明変数として扱われている。この意味で、ナショナリズムを説明しようとする本研究とは基本的な問題関心にずれがある。
- 6) ただしそれは、同研究が、実証的緻密性よりもメディアスポーツの抱えるナショナルリティ、ジェンダー、ヒロイズムなどに関わる様々な神話やステレオタイプを告発していくことを主眼とした研究であるためと考えられる。

文献

- Anderson B., 1991, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism (Revised Ed.)*, Verso. (白石隆・白石さや訳, 2007, 『定本 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行—』, 書籍工房早山)
- 有元健, 2003, 『サッカーと集合的アイデンティティの構築について』, 『スポーツ社会学研究』11, 33-45.
- Billig M., 1995, *Banal Nationalism*, Sage.
- 浜田幸絵, 2016, 『日本におけるメディア・オリンピックの誕生—ロサンゼルス・ベルリン・東京—』, ミネルヴァ書房.
- Maguire J. and Poulton E., 1999, European Identity Politics in EURO 96: Invented Traditions and National Habitus Codes, *International Review for the Sociology of Sport*, 34(1), 17-29.
- Maguire J., Poulton E., and Possamai C., 1999a, The War of the Words?: Identity Politics in Anglo-German Press Coverage of EURO 96, *European Journal of Communication*, 14(1), 61-89.
- Maguire J., Poulton E., and Possamai C., 1999b, Weltkrieg III: Media coverage of England versus Germany in EURO 96, *Journal of Sport & Social Issues*, 23(4), 439-454.
- 牧原憲夫, 1998, 『客分と国民のあいだ—近代民衆の政治意識—』, 吉川弘文館.
- 森田浩之, 2009, 『メディアスポーツ解体—〈見えない権力〉をあぶり出す—』, NHKブックス.
- Poulton E., 2004, Mediated Patriot Games, *International Review for the Sociology of Sport*, 39(4), 437-455.
- 笹生心太, 2019, 「スポーツを通じたナショナリズム研究の分析視角の検討」, 『東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要』54, 105-115.
- 笹生心太, 2017, 「スポーツはなぜナショナリズムと結びつくのか—日本における先行研究の批判的検討—」, 『東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要』52, 91-101.
- 塩川伸明, 2008, 『民族とネイション—ナショナリズムという難問—』, 岩波新書.
- Tuck J., 2003, The Men in White: Reflections on Rugby Union, the Media and Englishness, *International Review for the Sociology of Sport*, 38(2), 177-199.
- 津田正太郎, 2016, 『ナショナリズムとマスメディア—連帯と排除の相克—』, 勁草書房.
- 山本敦久, 2010, 「スポーツ観戦のハビトゥス—人種化された視覚の場と方法論的ナショナリズム—」, 橋本純一編著『スポーツ観戦学—熱狂のステージの構造と意味—』, 世界思想社, 256-279.
- 吉野耕作, 1997, 『文化ナショナリズムの社会学—現代日本のアイデンティティの行方—』, 名古屋大学出版会.

付記

本研究は、平成30年度および令和1年度奨励個人研究費による研究の一部である。